

# こだわらず 大きく学ぶのが ほんとの大学だ

1987-2

-①

社会学者  
橋爪大三郎  
はしづめ・だいざぶろう 一九四八年生  
れ。東大大学院修了。在野で新しい社会運動  
を構築中。著書に「電話」「公民社会論」。

新入生諸君には、「入学おめでとう」  
型どおり、こう祝ってあげたいと  
ころだが、とてもそんな気になれな  
い。まして大学二、三年生ともなれ  
ば、いやは何とお悔やみ申してよ  
いやら。というのも、皆さんの在籍  
している日本の「大学」、これほど  
世に奇っ怪なものもないので。その  
実態を知るにつけ、こりゃとんでも  
ないところに入っちゃったと、思わな  
いなら、あんた、よほどのお人よし  
ですよ。  
大学と立派な看板がかかっている  
からには、一応教育機関なんじゃ  
うが、これがほとんど機能していな  
い。下手すると、入学時をピークに、  
学力は低下しっぱなし。大学のおか  
げで英語が喋れるようになりまし  
たなんて聞いたことないし、法学部  
で、法律で飯が食えればめっけも  
の。芸術学部卒でも画家にやなれな  
い。企業もはなからこんな大学信用  
してないので、四年間のことはきれ  
いさっぱり忘れなさいと、社員教育  
を一からみっちりやり直すことにな  
っている。  
じゃ、研究機関としてはどうかと  
いうと、これがガタガタ。第一この  
国には、大学院のちゃんとした制度  
すらないのです。ずば抜けた連中は  
今でも、みんなアメリカあたりに留



学するでしょ。うかうか日本人なん  
かで研究していると、とびきり上等の  
頭脳もカポチャ頭に化けてしまおう  
というから恐ろしい。

## ユニバースってなんなんだ

これは誰が悪いとかじゃなく、日  
本人が大学というものをまるで理解  
してないせいです。

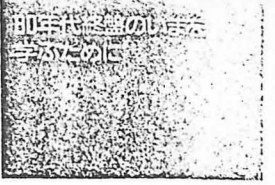
大学はそもそも「ユニバース」  
(宇宙・普遍)を名のるぐらいで、  
人類文明のためにある。その成員資  
格は、民族・文化・言語・宗教によ  
らず、知的共同体の一員たるにふさ  
わしい能力を問われるのみ。就職ま  
でブラブラするためのアライバイで

も、ドイツ・ニランドでもありゃあ  
せん。大のおとなのまともな頭脳が  
組んずほぐれつ格闘を演ずる、この  
上ないがちんとした場所なのです。  
そこで、教育・研究の実をあげよ  
うとすれば、アメリカの大学のよう  
に、野球かフットボールのチームみ  
たいに組織するのが一番いい。学長  
は監督。教授はさしずめ、契約年俸  
十万ドルのスタープレイヤー。学生  
は観客兼見習選手。教授はプロとし  
て必死に業績をあげるし、ダメなら  
クビ。ドライだけど、フニアでし  
よ。学生のほうでも、月謝のモトを  
とらうと懸命に勉強する。教授の移  
籍(トレード)なんてあたり前の

話。学生だって、あちこち大学を渡  
り歩く。業績主義が徹底しているか  
ら、月謝も安くないが、それなりに  
頑張って成績がよければ、奨学金が  
もらえてお釣りがくる。

これに比べると日本の大学は、江  
戸時代の村の寄り合いみたいな運営  
だ。みんなで安穩に生きのびるのが  
目標だから、競争なんかあっちゃ困  
る。就職が決まるまでは数ばっかり  
論文を書きまくって、どっかの大学に  
もぐりこんだとなん業績がさっぱり  
というのが日本の学者のおさまりの  
パターン。目いっぱいやって思け  
てても待遇がいっしょじゃ、あほら  
しくて、誰が本気になりますか

80年代終盤のいまを  
学ぶために



研究ノート  
1000万人のファミコン・ミュージック

橋爪大三郎

電子音や偶然性を織りこんだ音楽がいかに「前衛」っぽく聴こえたのも、思えばずいぶん昔の話だ。気づいてみればそれはもう、こども達のいちばんありふれた音環境になっているのではない。ファミリー・コンピューター。ここ数年それこそあつという間に、日本中の小学生をとりこにしたこのゲーム専用機は、茶の間で、またこども部屋で、絶え間なくその「音楽」を奏でつづけている。スーパーマリオ、ドラゴンクエストのような超ヒット作から、二東三文の数えきれない駄作にいたるまで、ファミコンのゲームソフトにはみんな特徴ある効果音がついている。いやそれは、単なる効果音どころでなく、立派にファミコン・ミュージックとよべる域にまで達しているようだ。

標準的なゲームを考えてみよう。その進行はつぎつぎTV画面に表示され、こどもはそれに反応しながらキーで選択を人力する。機械は、組みこまれた確率的メカニズムとこどもの選択の両方に制御されながら、一連の有限状態を経過していく。ファミコンは、人間と機械がつながった、一個のマン=マシン・システム、有限状態のオートマトンである。一回のプレイは、最終状態めがけてこのシステムがたどるランダム・ウォークなのだが、それは同時に、一回の実験音楽の演奏(いなむしろ、作曲)でもある。音の展開は、プレイヤーの一喜一憂をかたどる。それは彼の、ないしこのシステムの、内的状態の表明にほかならない。いともスマートな、かつての実験音楽の理念の実現。

この種の音楽体験と類似して見えるのは、おなじみのパチンコかもしれない。チューリップが開くとか、ラッキーな状態に達すると、はなばなし効果音が鳴りひびくのだった。しかしパチンコの場合、それは隣の台や店内放送と合体してしまい、サンタグムを欠くため、独立した音世界を構成しえない。どんなに電子音で装飾してみても、パチンコはしょせん、工場の生産ラインやキャバレーの喧騒、すなわち、ひと昔まえの産業社会の音環境の系列に属するのだ。これに対してファミコンは、OAやホテルといった、産業社会の新たな変貌にみあって個別化されはじめた人為的な世界経験に連なるのではないか。

では、実際ファミコンの奏でる「音楽」は、どんな代物なのだろう? ファミコンの登場は、かつてのテレビのように、もう一度決定的なインパクトをわれわれの音楽感性に及ぼすのだろうか? こんな疑問を、私は楽しい宿題としておく。

新刊紹介  
『四重人格/ビート・タウンゼンド』

大橋悦子訳  
四六判 182ページ 晶文社 定価1300円  
(Pete Townshend: HORSE'S NECK Faber & Faber, 1985)

60年代初期から20年間、ブリティッシュ・ロック・シーンに君臨し続けた「ザ・フー」のリーダー、ビート・タウンゼンドによる初の書きおろし短篇集。現在のヘヴィ・メタルやパンクの先駆とも言われたザ・フーの活動の中でもう一つの特徴であったコンセプト・アルバムあるいは(史上初の)ロック・オペラへの志向が、そのまま延長されてこの13の散文詩的短篇集に結晶したと思われる。ザ・フーおよびソロになったビート・タウンゼンドの音楽をそのまま文学に置き換えたような作品である。

ついでにアルバム「トミー」「四重人格」「フーズ・ネクスト」「ホワイト・シティ」なんてLPを聴いて、ひとときその世界にトリップしてみるのもいいだろう。現実の音によって作られた、シュールな虚構の世界から、何か新しい音が聴こえてくるかもしれない。耳はなくても・・・。(大橋悦子)

レコード紹介  
Steve Lacy: THE KISS

Lunatic Records 002 Y2800  
◎於: 広島東区民センター ◎録音: 1986年5月24日  
◎演奏: スティーヴ・レイシー (ss) ソロ

スティーヴ・レイシーの現在の表現を多少なりとも聴いたことのある人なら、彼の表現を単純にJazzとは呼ばないだろう。しかし、強いてジャンル分けをせまらればやはりJazzということになる。このレコードは、あまりよく知らないでJazz嫌いの人、ジャズになんとも興味はあるが未体験という人に是非薦めたい。「ジャズは燃えついた」と言われてから久しい今日でも、Jazzの周辺でこんなに豊かな果実が実っているということがよくわかるだろう。レイシーのソプラノ・サクソは信じられないほどよく歌う。音色の豊かさ、音域の広さ、運指のテクニック、アドリブのイメージの奔放さと奇抜さ、どれをとってもソプラノ・プレイヤーの鏡とでも言うべきプレイを展開している。けっして寡作の人ではなく、聴き応えのあるレコードは少なくないが、それら過去の優れたものと比較してみても、このTHE KISSはかなりの上位に位置するだろう。それほど高いテンションが保たれている。(島原裕司)

ね。だから講義はつまらない。手抜ききのし放題。もちろん真面目な先生方もちゃんといるので、これはいかんと思心かチクチク痛む。そこでちらほら拾いものの講義も混じってるわけだが、こんな本人任せの有り様では、組織としては失敗なのでね。それに学生のほうでも教授の手抜きを見越して、勉強意欲なんてさらさらないから、良心派の教師もだんだんばかばかしくなって、長続きしない。

ほうは当然、どないしようもあらへんのや。こんなひどいところに入っちゃったからには、じゃ、どうしたらよいか? じっくり胸に手を当ててみて、この大学の学部は何しに入ってきたか、わかっているひと何人いますか。まずいないでしょ。こんな特集に手が伸びるといのがその証拠。無理もない。同情するよ。そんなこと考える暇、これまでほとんどなかったもんね。

でもどだい、そこが間違いない。なんたって、あんたらが悪い。あー俺は失敗した、なんてあたしはアホなのヨ、と思いなさい。まごまごしてると、このまんま卒業させられてしまうんだぞ。さあどうする。

で、この道は二つに岐れる。片や、そりゃ大変と慌てるひと(あんたに幸いあれ)。片やそりゃ万歳と喜ぶひと(あんたはもう十分幸いだ。勝手にしなさい)。最初のひとたちから、対策を練ってしんぜよう。さあ困りましたね。授業に期待しようなんて、いままさら読みが甘いですよ。まず発想の転換。そしてヤル気です。いままでさんさん点取り訓練やってきたんだから。あれは要するに、どれぐらい出題者と同じ思考パターンを踏めるか

要するに、日本の大学は、究極の知の輝く殿堂からはほど遠く、なれあい甘えあいの惰性の塊なのであります。これは今に始まったことではないので、おいそれと直らない。読者諸君の卒業までには、とてもじゃないけど無理です。いや、皆さんのお子さんが卒業するところになって、大して変わんないでしょうね、残念なだけ。

だからもうこの際、国鉄そのけの思い切った大ナタが必要だ。どこにどう手をつければいいのかも、かなりはつきりしてるけど、これ以上詳しい話はギョーカイの内輪話になってしまうので、遠慮しておきます。さてそこで、傾向と対策。大学の

今こそ困難に挑む体験を 大学は「大きく学ぶ」と書くわけですから、いろんな体験を積みましよう。活字ばかりが本でない。社会こそ偉大な書物である。ただ、言っとくけど、自分に向いてないこと、およそできそうにならぬことに体当たりするほうが、のちの

「Find Your Own University In Your Real Life」 退屈な講義に縛られるだけの四年間は、とにかく長すぎる。で、対策その一。その程度の学力は、なるだけ自分でさっさと身につけてしまおう。対策その二。講義は遠慮なくさぼっていいから、浮かせた時間を自分に投資しよう。これだけのことをして、やっとあんたは一人前になるんだ。